佛諸第一義集

乾

中村俊定文庫
文庫 18
648
1

第一義集自序

正風體乃俳諧也あるゆゑ也葉制作之著也次
まゝ放肆なるゆゑ虚我と見て恐ゆゑ勢壽
實をとめて実とせ次手変第化無碍
自在なる我要とも隨氏以てなく虚無ゆ
謀しるゆゑを責め寂寞を叩て音を
求むこゝ以なく我道ようゆへ王代遠く
國異なりといへとも賢者結格言

古今輙をおなしうすへきり結句蕉門尓
いしんとまゝる乃輩多くは虚實のさかひに
踟躕して路に其奥家を窺ふ事しかは
得ぬ忽自己結理に他裏に沉ミぬ故
是しくそ神正の義一を当て以て止ると
釋せり何るは政結字乃意を兼ねる
化民朱俗の一助ともなしむかしは
雲にして其色的く美物にひたり

摩訶ハ曲ハ如し古れ正法結大意や
蕉翁の瑤章五句を結辨製まちく
なりしとも屢性理にまとへて喪諭乃
心を啓先りまことに一箇の婆心なるに
從来諸家結句多く形然たり志ハ何れと
杜甫も下して寡かに次深く賾を探る事
あらさ辨ひこの結意味いかてか理會せ
ちにおのて愚者の一得に初心の為に

邪路を塞て正路を開かむとにこそし
文の意の相撰まるゆゑに伏て識者の雌
黄をもひ侍るまゝ惟旨
天明三癸卯年とし仲春半瓢子三力百拜

俳諧正風體鼻祖
芭蕉桃青翁肖像

俳諧第一義集之乾

鼻中庵三力著

意馬心猿

元日や猿にも着せしゝ為猿の面

意の馬ハ塵乃境にもしゝ里。心の猿五濁の岐にたゞ里。念々相續ひて朝昏やむ時なき人の志を見ゆるなり。為ゆ鳥の道を行じ。魚ハ魚乃為を行して志ゝも跟なし猿ハ猿の形をのばかりよく踐里。人の〻人の道を志るで志ゝ物の猿ハ猿の面を折着せいつしか猊拵るゝを知らぬと云へるんぞ。惑べし孟子の所謂仁ハ人の心也義ハ人の路也

中村俊定文庫

其路を舎て由ず其心を放にして求るあり我志ぶと云へる
道理に合へる事。元日と云ひしハ日に新なれ共。とりか正朔乃
風起には小人もこゝな本智にかへるべし。我れも一瞬の間にしる
半ちまち森羅萬象にあらず移るといへども。志ぶらくは
清ぶに塵想もをれば改むべし。やがて物我にいざなれ
ちろ我馬に馬の面をきせ。心の猿に猿の面をかきせる
生涯を経るなんとの謂なり。此念想須臾も間断なくれ
どもなへての人には年にやと示しきんめり是そぞ一箇の方便に
志て年にと思へハ月になり。月にと思へハ日になり。日にと思へハ
時に刻に見へ候ふ我面を考る事り。理ハ一也といへども

唯元日と云ひしまて一念機発の意味深ちなる所を察ぶし
面に我蜂を拂ふや　花の春　嵐雪
此蜂片時も身を離れぬといへども是又何ぞ我神魚。四海一般
多我寿。水の音までもしへ候りぬるハいさゝか心の浄穢を拂
まて既に身の上の蜂を拂ふなどの。ぞ給ふ事にも何ぞ
さ拂ぶとく猿の面脱ぎて本の面皮をしへしとのく不
業に拘ゐて薄氷をぬむがごとく戦競として敬て大乃を
仰ぐはいかなれ我汝とかんと云ふ

本来面目

誰やらか姿に似たり今朝の春

世以て著く知る処。祖義は世の塵埃をまぬかれ春秋同一なるが如くに逸興に著きたる所に心有し。然る我嵐雪がもとより二月山袖を帰りかれば舞布税棄て若そはじめしなまひ斯ばかりまりぬれども我も誰やらが姿に似たりと。よそりかれと称り一通りは此文の作れどもそれは言語のうへの穿鑿にして世の塵埃を。まぬかれしと云へるものにはなし。今宮に美せざれば無和無色なり。いかにも嵐雪より小袖まゐらせける時の歳旦なり其山袖を若し誰やらが姿に似たりとは。時にとりて其趣向。物に准へたる俳諧の一曲にして遠玄深長の程なり。其

准へに泥ては肝心の餘情ならざる事此句のうへに限るべうらず色相をもすれたる。趣意を述るに奈何ぞ我姿を喩へんや古歌に。揚らぬ井に溺れぬ水の波たちて新もかたちもなき人ぞくむとよそ人ぞくをも味ふべし。我姿に似たり靜謐に明らかなる四方の初空を観じ誠に誰やらが姿に似たりと云へるなるべし。一休禅師の面目坊が其姿とよありけるに今符合せり皆是真理の法なれば無主の主を主とせり佛文殊に告て言無心無念の本佛は不思議を以て體と須本去来なしと蓋有に為せる無に似たり。夢も臭も明らかなる物をいへり。此本味を會得せざれば口耳の

俳諧にして古人の糟粕のこと輪扁が識を受ぬし唯何となく
誰やら好愛言に色身をはすれ。句中に一物もなれ千年に
一物なりこれを言ふ如くとなふ

なりてなれ好月とや瓜なしき　其角

是即色相をもつ是なる一躰の意味也。仁者は是をみて
これを仁といひ。智者はこれを見て是我智といふ。辞は
かはれども至妙のはなひ同一なるを知るに俳諧は其
栄耀の厨ぬと思へる人なり。それ我朝を敬ひ御国と
申奉るは神の御代より傳はりし三十一文字。雲の上の御
をしてはすひかて普く四海を照し給ふなるが如くに。志ふ何れと

鄙夫の忍るべきわざなれば殺してこれを遠ざけ。俳諧亭をとりて
頑愚なる蒼生の心をやはらぐ実の道に引入んと欲ばさう
御国の風俗なるべし。さる我唯口をさしとなれて
其意を知らざるものなし。翁が曰世人詞のことをとりて賞れ
道に入るなんや天地の物を躰として。かりに詞の花に接べる
名を往古の誹諧を促とへども。心を往古のものにはすれば
詠にそれ實情を慕に志なんば速に口を閉へし詩歌
連俳ともに栄耀の貌びにはすれば是奥義にしてハ
鬼神を越ぜしむる諺なりだとひ見れば我越ぜしむる事
にやがてこれ有道の正しき人を沙とし友とし。勉強してそ

志れ道を学ひぐ則その違ざるに至しといへん儒釈及も
何しく学ふ時は三毒となりて害を拒く媒となん欲唯
よく心を用ると。用ひざるとに有へし。さ然ば儒道ハ儒者より
頼ひ。佛道ハ佛者より弟ざるへしとなんいへる先言
学ぶにかゝふ是し

目前分明

人を見ぬまちや續れうらの梅

此句さ如く結説ありといへども。皆とて穏当ならぬ。いふこゝろハ
易に艮其背不獲其身行其庭不見其人無咎といへるが

ぬし近思録存養類程子曰人の其止るに安んぜること能
ざる所以の者ハ欲に動バなり欲前に牽て其止るを求む
とも得べからず故に艮の道當に其背に艮ぬし見る所れ者
前に在りて背ハ乃これに背く是見ざる所も見ざる所を
止る則ハ欲以て其心を乱さしとなりて止ること乃安し
不獲其身とは其身を見ざるなり我を忘るゝを云て
我なき則ハ止る我なきを能ハざれば止るべきれ道なし
とゝこゝ此續の背の梅も多人の背れ也し。背ハ立時も
そもに立。座すれハとも心座しいさうも私慮なりしを
心なり心随てゆく故に其背に艮べしとハ見るれ此その心

つまて色形なきものを知るへしとなり。見の見るとき見ること
見よからんとて其底に行て其人を見ざるもしれなり。見ざる
所に山ある間は三心乱れるのみなし。をのく其良智をおもふへ
ならん見解に着して鏡背の梅子止るの能はず。これ
云ふこと五蘊の魔魅にほゝされぬるの外。他なしといへる
にしくなしてし。蓋これ古語より求め出せる一章にはあらじ
唯よく意味に符合したるに釋す是は先見ざる
所の謂なり。猿の面にうつる物は誰も見るべし。見ざるとも
それにまをつけざるべし。是亦所詮なり

　　支考

　　ある時は新やの猿子あし出

鄙にうつる色形は去て鏡中に止らざるは本性に喩へなま
しり。嬰子は雑史にあり。やはりもまことに然る
花はちらずして猿にうつりしは誠に電光石火のごとしなり
観念して死生一如の甚深微妙を悟るまでは鄙にくく
なれを書猶ほ書なるに不立文字云々。其上に文学に
達しなば博学豪傑は君子と称ふべし。文質彬々を
ゆは学問の力なり。直理玄々たるは見性の力なり此二つ
のを兼備して能行にをを聖賢とも云ふべし別に
聖人佛なりとて異なるものなし今を聖人おはしまさ
なん。これを知る人のなからんはいと遠き事に思へるなるべし

安き瀬を人に姿つよからぬさ　　嵐雪

頁ふくるまで鼓へられて世俗の意味なり安き瀬と、淺の背乃
梅のおもしろき人に姿へかくハ眼を開かせたる是即誠意なり
一言ふしふさ天の道なり。これを誠にするハ人の道なりと
云へる中庸の意に合へり。寺に合する事。爰に其角嵐雪野坡
支考等の句を引て其句々を一々に挙る餘ハ事繁ければ
贅せず。都て無名の句ハ祖翁と知るべし

道之大原出天

よし野にて　桜見せうぞ　檜木笠

天地ハ物を生するを以て心とす。生ずる所の物因て各其れ天地
生物の心を得て以て心とす。故に萬物一体といふ。最草木
鳥獣ハ形氣を受ざるゆへに草木ハ逆生として逆さまに
生ず。根ハ頭にして枝ハ尾なり。鳥獣ハ横生して横さまに生ず
横に行けれども其ハひとつなる道を行ざる事
横たはりなし。人ハ正氣を受て直に生ず。萬物の王たるゆへ
なり。故に萬物の霊といへども。其道理に昧く一路乃
用をも作ざるものハ草木鳥獣にも劣るべし。此ハ目に於て乃
調度に至るまで天地造化の一物ならず。我物と思ざるものを
知りて疎にせず。しゆへ翁ハ常に此理を内にして行脚乃

首途まを先ッ檜木笠に一礼して。揖見せうとの戯ハつゞと
なるべし人我乃情をもすれてそのあるを主とせる言ぬいたんとなし
袖も正しくおもしろ小法師も親見ん小　野坡
猫も杓子も下折分身思ひ合せて思惟あべし或詩人の曰
向上に説るなるに元是俳諧ハ俗談なり。答て曰詩歌
連俳の道に區別ありと思ひ。海が詩作の俗なるを歎ひなし
子曰詩三百を誦じてこれを授るに政をなすれども達
せず四方に使して専對る事能ずんハ無ともいへども亦奚をなす
せんと。専對るものハ是心徳なり。三教同一の理をなして體とする
に何ぞんぞ又何を以てせん。俳諧ひとり俗談とハ云ふ事かゝ次

天地の間にあらゆるものハ体用を具へざるハなし詩歌連俳まで
いはゞ言外の餘情が辨なり言に所が用なり體立ち
用行ハ此味ひを知るや如何。又僧に對する俗となれば論るに
たらず俗をもなるゝ時ハ皆以て天なり。天をのいひあはず人をもて
いはゞ先ハ故に人ハ一箇の小天地なり佛經儒經も印土漢
土の俗談なれども元亨利貞の四徳を見すなし是をなす説
あへば俗意にならず實情天にあれば俗を離ることいふ
なり。辞を飾り心を行し實を失ひ故にする俳諧ハ俗中の俗也
これを名て雜俳とも雜談ともいふ。されハ即今俗に對して
俗意を正ぬ為の書へと知るべし此実情のさらひを論ぜず

俳諧にいふ所の詞は、いやしく今日の詞は俗語と心得、或は民間の弄
びなりなど俗談と一概にいふは、言語流行して後世に至り今日
俗語も再び誹諧に用ゆる時は又いやしといはんや。それは妄計の沙
汰なり。既に禅録は唐土の俗語を記く書なり。然れば是をも
俗語共俗談ともいふ人あらば如何。子曰小子聴之清斯濯
纓濁斯濯足と云は小童がうたふ歌なれども道は中庸に
叶へりとおもふ。芭蕉翁の云、俳諧は童子の語にあるまでの時に
よろしきは假り用ひ侍るなり。先觀なるにまかせて、しかるも附合せり。
時にあたらしきとは則天理にかなふといふべきなり。無益の雑
談なれども見識をもつて云ふ時は、俳諧は心の花ぞといはん

不老不死

菜の花や赤良には古き佛達

古き佛は古暦のごとし。麁抹にはあらで、况天子より今日の閣
なる人々も佛を新古の差別もなし。形ある物は皆此の造化に
して新佛はさせる物に何かず。趙州の語に金佛炉を渡
らず木佛火を渡らず泥佛水を渡らずとあり。形は次第に
斯のごとくなれ共滅を免れず。古き佛達の名をも
之ても其名のみ残りても、又回禄に焼滅すとも。何
れも菊ならず千歳の名ありといへども伐られざるは

其香のこゝ。其の香ハこれ目ふ人ならば其目ふ人ならざる所を天
とも神とも佛とも説ふべし故に此句ならば。佛像ハ滅する
期あれども菓の香の始めなくなれば殘る花心を。不生不
滅の佛性にくらべるゝ也。然れば古今佛達ならざり
ならば其意味ハ詞たらざるやうに侍れども性躰の句格も
皆ひて斯のごとし。何らさ曰ハいはゞ譬ハ莊子の天地
一指萬物一馬といへるも理馬陽冬にして常の事なるは
あらざる物なり。凡てこゝ玄中の意味ハ新の事なるべし
且測物ハ絃なき琴を撫て呼此琴中の趣をしらば絃なる花
こそも其妙音心に淺ふべし。此菓の香も生ずべく花なる義

時を思ひ出せば時としてこゝ薫らずとしらふるまし。其れなく嗅
出しなば論る花古佛の本体顯るべし。斯いへば本性ハ目ま
見へずして芳しき花あるべしと雅言をとべしこゝ

瑠璃琥珀玉に香ハなし　蕉の花　望坡

弟りこゝくとも面向不背とも一句の道ならハ花も角も
云ふべし。本来玉ハ現にして夢も臭も好し。然れば極楽の
ようほひも色即是空と觀ずれば殘る物ハ生ず香の
其香も亦言ふ所ならば是を以て上天之載無声無臭至
哉との玉ふ物なり。云へハ著しいはゞ呼べし。故に智者ハ愚者
となれば是の文殊曰我一切の法において無言無説

無示無識諸問答をなすけれども此微意をばうら
ユキ文をだに事なりべし

通身無影像

丈六にかゝる絵に高し　石絵上

阿波荘新大佛といへる鷹跡をもてむかしき石臺を額突
よりあり釈鶯は樹下石上をもて山覓をもて花玉へは。樹下といひ
石上といへる釈鶯絵詞なり丈六とは佛絵をかけるとし陽光
とは佛性を喩へられたり。是又此詞に着し。本性は野鶯陽
光絵にて花をのなるんと。かゝるへし思ふべし。有とおもへべ

有の見を居。無と思へは無絵見をおつ。是世人一般の通病
なり。西風の俳諧は此意味一大事にて趣向をもて趣向
小着せず。曲節をもて。無節を若をば唯志れたる通りを
有絵俗にかゝる人は此中に意味あり古語に一枝の菓を
拈起して丈六絵金身とするほとゝ云へり。理屈ゝ越とすれば
考べし此丈六は是無量の丈六。此陽光は是無邊乃
かゝる絵ふ。石の上とは不変絵道場且俳諧の縁語なり
斯絵ばとく釈し侍ひは。おこがましく此へ侍ひ道辞絵
句は皆以て禅意にかゝるが如へなり本人の日禅家には
見性成佛と示し事なれども念仏家には云ふ法なり。同し

佛法にも斯のごとし。左らバ誹諧ハいかに成べきや。答て曰
念佛宗に其沙汰ありとハいかに。入我我入機法一体といふ
ことにあらずや。天台の止観。真言の阿字本不生。花厳の三界
唯一心。或ハ浄家の一心一向。日蓮の妙法にいたるまで。ミな
法性を悟るのみか有べき所歟。然るに今諸宗の講談に
これハ不可得の説これを不可思議の説とて。肝心の意
味をば隠して置き。たとへをもつて説給ふ所を實にしてあり
導師さへ本然の理をしらず。唯經文の字義の論じて
目をさまし得る筆なし。故に禅法の心裏の妙法に及ぶべく
小人ハ思へる事でし。佛法ハいふも更なり神及儒道も詮ずる

所本性にかへらしむるの為へなり。詩歌連俳とも微
意をもとさざれば多くハ妄語に落べし。捨て禅意のいら
ましめ知らずんハ忽祖翁が句ハ解べからず。俳諧に酔て。ごとく
俳諧を醒ざし古人の喩へも連哥ハ半字経のごとし
色相方便なり。俳諧ハ満字経の如し。真如実相中道
なりといへり。本来一体なれども連俳と名のかはるは法にて
別時ハ斯のごとし。さハいへ性躰の句ハ翁にも少し。唯此大意を
知る時ハ理にかゝはらざるといへど。理にあたらざるといふから
その信の道に近きといへん。糟粕をくらひ向上に趣ざる族ハ名
家のまねし徒のなかんづく金を以て誠の人ハ言をもつて

試む時先言最恥ぢしぞもまた頓悟の輩道躰の
句時ふ風雅を稟せたらんハ次に口惜し俳諧ぞ。たゞ
うれの風雅あり。さらばぞ性理まも沿ぎらば理障事
障とく嫌ふまえを能しりて。知らぬふりこそ。ゆうし
さむらめ聰明叡智守之以愚とも宣り

天地同根

命ぬらば中に活たる様うれ

大仙寺にて土芳に逢ふて詞書ぬり先ツ芭蕉と土芳
こゝ出りに庭前乃様を詠る之此時の命ふたつぬりやなしや

我いのち時二ツとまはいらじ二人の心をさして二つといへる
なれども寔ぶ肝要ぬり聖人乃一貫も神道の唯一も
他事ぬし縦令二人ハ十人までも命ハ性也一也體用と別
時ハ性を解ふして生滅なし命を用ふして動き変と
いへども總てこれば一つの物なり然る我自他をこうち命
ぬらばといへるハいかゞんと二文ぬるべし。是俳諧の虚を
して實ハ色身二つ時死物をいへり。中に活たる様とも
堀ぬ井にたまらぬ水時波たちて新もかたちもなり我
人ぞくむといへる古今の心ぞ人まで二人ぞする其中に
活もせぬ様を忽活たる ぬり。然れ此様も又俗の一物まで

唯実の花なれバ。桜の葉に眼すも人の手足の働くも
皆是天性自然の道理にして如来自他平等にハ死に示
死に行くとも即今對する二人の性ハ此桜にして木の
ミ也。他念なきまで。罪實をはなれて二人の形ハ
死物ならし是をのぞいて何ぞ命ならん此発語ハ
死句なり。さるに依て中に活る桜動の相ならべし

桜木となれバ浮しめさりとて　　榎草

性にて帰して一面の虚空蔵とならば形ハ地にして
一面の死物菩薩となる。されバ是死物にて動物なし
梢木ても草を生ぜバ即活物なり枝手も折りて捨を

皆是神なり菩薩なりとぞうたふハ死物の活物なりと。
活物の死物なるべし此妙境をいふ面白し。片時もわすれぬ
事なりかし。微意筆端に尽すべからず

明鏡當臺

猫の恋やむ時閨の朧月

或説に恋猫の声かしがましく、しばしば此心ハ静やかにてされ
ども閨の淺き月を詠じたるにてハ所謂形心の形心したし
やむ時你やの朧月とあるを端的なりと世にいふ月ハ最
前より閨の影を浅くいへども恋猫の声におどろか

されば他念なく吟入し也。其間は唯猫の声のみにして我も
なくなれば闇も如し。又其猫の声やみぬる時闇なる月不圓
目にかゝれば忽猫の声は忘れて見て見る。目もなし何もなし
唯月のみなり古語に間不容髮といへるなく。我る心は間ハ
髮筋もいれば暫して彼れと思ひ来るは皆仏て思案。分子
なり、月潭底を穿て水に痕なしといへるとく忽まつり
かゝる其心の跡なれば所思惟すべし

鶯やまさし泣子なし母は耳　野坡

端的の意味同一なり黄鳥の鳴音は目前に吟なぐ者
泣子に不圓こつる慈愛の心に鶯の声は止らず前に在ると

まれは忽焉として後に在り此自性はまさしいかなるんかし

無相真形

俳や姨ひとり泣く月は友

大和物語に信濃の國更級の黒に住む男。姨を養ひ
親のやうにかしづきに女房はしく惜して夫にさがしらといひ
舎兄孫に深山に奥に捨させたり此男かぎり形く悲しく
一夜目もあはで歌よみける。我こゝろ慰めかねつゝしなや
姨捨山にてる月をみて此故にこそ姨もなきバ男も
泣。吟人も泣るなり姨ひとり泣とよめる不。姨となり結文

姨を棄しハいかへ結事ふて今其山の俳を見て泣りの
ゝ芭蕉なりぞれ姨にハ何しぞさる時姨ゝより泣と云へる
所に眼付べし姨を捨しハ年ふりゝ此も其山の俳を
見てあはれむしを感ずる時の本性ハそれ姨に何りて
芭蕉の翁ハなし。前に云へる良其背不獲其身の謂ん
是故にぞ泣ゝ泣ゝ姨ゝより泣とハいへり。身の友とハ
彼の姨の名身地にうへしぞ此ゝ此ハ同一にして
今眼前に在りたれど余何ぞ一体の身の友と云
庶清水もろ結蒼も志りこはく　此事
これ則一心水庶に融通しくとおづから世の蒼境を

離れたり思ひ合せて考ゑし

五蘊皆空

行者を近江の人とおしこれ事
湖水に望て春を知しむと題せり此句を江の人とある
詞に看し或ハこのふまでハ美濃の人とおひぐふハ江の
人とまた情と云へる心ぞへとなむ精詳さ有くす此を江乃
人といへるぞかりにて湖水の意味結るべ其事愛来かし。そ此ハ
即今表一通りの穿鑿なるんも一句の餘情ハ寒来異性
常なれども時に春の日の長閑やうなるに既に夏を隣して

なりあらし。空しく光景を送りしと。打驚見無事を觀るハ
ミ孔人の常也。時に湖水に臨して行き我れし然るなり
誠に性の大なる我大海に掲せし古人のんをもかゝる妙句に
こゝろ思ひ合せべし。芭蕉豁然として湖水を眺に何ぞ色
相をかゝんや。されば其時の本性ハ湖水一面にして他物なく
無我實相なり此ニ係を。いはんとくを江の人とハ。湖水
一面になりし。主人公を云て。其本ハ少者を惜めるより
欲しこれば。ゆゑ者を湖水の一面に融通する主人公の惜ミ
あるぞと趣向を求めて所の名によせ。近江の人といへるまて
湖水の結ひろ句中にこりしるものゝ。を江の人と取りて

おしみあるぞといへる略語なり見る人感實を感べし。其
主人公を主人公とも。面目坊といへる時ハ理屈の沙汰を
落るなり故に何となく近江の人とも見るまで理屈ニ云ふ。
もまれ云ふたる餘情こりしるものゝ又此うへの余情をいはゞ
孔子川の上に在して。逝者ハ斯の如か。是我を舍ずとのおひ
しむらく四時の變化も人の身も須臾も止ず。然れ共流水に
古今の色なく四時亦是る物なし。人ハ老て二度かへらざれハ
寸陰いたづら吝まざらん其人の身の時うへを行き不喩へて
行きを。産ぬる人のやうに思ひて。惜しあるといへるんなれ
かゝて斯ゝれば俗情にハもやく通ぶれども。うへ結んでも

湖水の二字捌かれし唯とのみ云ふとも余情に含んで
本説の性理に引付る時ハ句意あれらるゝ

在火不燒在水不溺

多取やゝ氷乃僧の皆の音

句選といふものには水多くしやまりて冬の部に出せり。是
も東大寺二月堂におゐて。都率の密法をうつし。達陀の
行ひたりし時。若狹の井の事をいふ事なりて書き。又氷の僧
を鉢に僧としたる俗書もなり。猶ほ心ゆかしき氷の僧と
いへるにこれ深き心もあるべし。譬ハ一片氷心在玉壺といへる

おとく一心不乱の辞なり。壺中の氷を見る時ハ一心氷に融通
して玉壺に在り心を辨ずる即今氷心の外に他物なしといへる
古詩のたゞ此其玉壺に陰しも今井中に陰むも心。相似
たれば幸に此語を假り用ひ来り。されば行法の僧ありし時
清潔なるものハ氷のめく鏡のごとし若狹の井の水も
一大変にして一心不乱句論なり誠に衆徒の本性ハ井中
も融通して無念無相なれば我相ハなしといへるんがへを
一片の氷心より思ひよせて氷の僧といふ事なり。尚ほ
氷を踏がごとし。斯ほどの宏実性体の句には無し。
此味ひをしるべしす。此岸に遠へる人ハ名字を死物といひ

又我相なしといふ事は其肉身を即ち火にくべても水に入ても
熱うしぼや冷るかしぼやといへり火をもつて熱さといはば。
あとのばうら冷るをもといはば其あつきと知りつ先さを知る
をもつが即性の働きなれば時ハ熱き冷るものか。但す
なるかしが我形ハ死物もどし此物境ハ識得の君子ならでハ
粗ひもしがたし。佛に向へば。向ふ佛のこゝにして何も思案もなく。
機法一般なり。さ然バ鬼に向へば即心鬼之。井中に向へば。井中乃
あるもの。又廻廊より明松ともしつ出て。堂の内陣に入る時ハ。
をのく明松の火のこゝにして。我相ハなし。斯のごとの本性ハ
名て不動明王とも説也。火も燒す。水も溺ぬるに

いうぞや。却水取ハ若狭の井なり。堂より隔てゐしまゝにあり。皆乃
音は内陣に入ての事也。此皆の音ハ達陀の行ひの秘事也
蓋皆の音といへども。元是空音なり。其空音を観ずる時ハ
即今をもつて観音なり此所深く考べし。却水ぞや氷乃
僧といへるまでに。若狭の井にして皆の音ハ内陣なれば
一句破るやうに其内此所にあらべし水をとる時ハ
一片の氷心となれる衆徒の忽履の音と変れども。其
井中に出る念相ハ如し。今ハをもつて皆の音のこゝになれり
と。無我實相の躰を述べ。氷面鏡うつる心の痕なく。若物
に特じて色相を離れたる行法の本意をよめるこゝなり。いと

凄冷(スサマ)じくなるとくれ

金剛正眼運乾坤

観音慈悲の雲

花曇りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。深山(ミヤマ)幽谷(ユウコク)の雪(ユキ)も花(ハナ)の雲(クモ)ともいふべし。

花曇(ハナグモ)りともいふべし。抱朴子(ホウボクシ)よみ遠(トヲ)きを望(ノゾ)むとき妙(イヤシム)なる人の事情(ジヤウセイ)を聞(キ)ふ信(シン)仰(ギヤウ)の徳(トク)を見(ミ)ふ能(ヨク)く修(シユ)行(ギヤウ)を積(ツ)むとき仏(ブツ)菩薩(ボサツ)の霊(レイ)山(ザン)会(エ)に列(レツ)なるを聞(キ)ふ。況(イハン)や当(トウ)世(セ)妙(メウ)所(ジヨ)の観音(クワンオン)霊場(レイジヤウ)を順礼(ジユンレイ)して結縁(ケチエン)をなすをや。花の雲ともいふべし。虚空(コクウ)なる仏(ブツ)国(コク)土(ド)を観(クワン)ずるに自由(ジユウ)自在(ジザイ)なるを見(ミ)ふ。奥(オク)山(ヤマ)の雪(ユキ)も花(

貫ぐ其炭園の中も明らか事べし。渾然たる一物なれば
通ずるが故に圓通とは云ふ成べし。これ別記者ならずや。
一心天地に充滿して鋭自在なるを十一面千手千眼とも
説ふべしされば過去の諸佛ハこれ心法異名なるべし
性を離れて別佛なし。おやアちて画餅を喰ふるなるべし。
六祖壇經に曰分別一切法為外塵相金剛經に曰法猶可
捨何況非法とや又六藝法其ひとつに法藝とふなり着
しては塵刹に落べし。丹霞の木佛。徳山燒經いかなんと。我身
も物をおこして事をこしして成佛をべし。ねこの説を信ふ
少居る人戯れて云。何某はれて此の諸歌しける時に

兼好法蓮靈来りて末席よりこれを殊所し涙を
押へていへらく。我生前にては何とかく唯徒然なるまゝに書
けれ称する物をさこれ意味深く説ふるよりさしかる
よしさ然ば芭蕉の翁もさをる深花心ハあるべし況と語り
ひへ里。曰いかにも其ハ通り成べし。識者ハ工ニ於くいへる詞何心
於く所なるを皆自然乃ありさ如ふて道理に合ずしくふ
事なし。故に真理に引付てこれを講釋する時に孔孟
佛氏の金言に禹頭喜ふるなし。元来古今同じ人情
なれば無識の人ハなぞこと其物をいふんとして。いのべざる境に
落し大やう似たるなれハ似たれ共。是なるなれハ是なるし況

たまく大乃蓮を登れ喰ひ行てあて道理に合ふも
行りといへどもこれを救ひ人とするに符合せざる事なれ
ば。故に後世に至りても其人の賢不肖は一部一巻の
書に分明なるものなり。されば一句一言ともも仮初に
吐ぬ事はいふべし

太虚無雲清鏡無痕

雪しく雪今日何是れ名目歟
屋外にて不和なる人を示されしとしくく玩味すべし
雪しく雪しくは。夏れ一心天より受て清らかなれ天に

不測の風雲なるが如く一旦れ怒に掩て心鏡の暴るる
を何是の名目とはいへり。春は明らかに師是は心れ人間づちなる
自然れ行りて面なれば幸に何是の二字を結べりさいへ釈高
も猟八れ明星を見ると先ず成道し給ひぬ我又何人ぞや

明星や　様さしこ先ぬ山のつら　其角

其角則雪山を出させ給ふ時の心ぞを寄て芳野山乃
曙に目をおどろかせし時の一句。様さしこ如とは自性を
見定めて尚なり。山のつらとは関を心の開けたる。蓋は此
一句を以て。晋子が心眼を知る事を知れり。今に秀
逸の沙汰し侍れ其本然の理を味ふもの少なり

明星ハ乞食も見る也雪結上　嵐雪

是ハ臘八の日を一時したるのゝ。見性の旬とふまハ何もじ
併期のわく諸道に業をつけ。前物を主として考る時ハ
何是結いとる也其中にも忽心意結眼をあざるといふ
事有べし。天に不測の風雲ありといへども日月ハ曇
なくいづれども圓明なり人迹一般結遠雲に覆也
しとも奈何ぞ本性に其曇なしん尾が結何某かゝる
一句に愛明せざんハ一生何是の名目まるべし

心華發明昭十方刹

神垣やおもひもうまず涅槃像

或説に古云ハ二月十五日　皇太神宮へ詣ぬ諸山には
涅槃像を供養せり神垣山結六根清淨なるに。もろく乃
不淨見むきもやらず。我ハ神前に。願花なるといへる心ぞへとんこれ
心ぐハ非也。いまだ神明に期実て称えん像のまゝ有りひかまず
明と足恭なるべきを。神ハ聰明にして両道なるから其道を美
じて偽を罰て抱朴子にも見へたり。又曰神垣とハ宮川よりうち
とふ。神おに限りてあるに何らず二月十五日外宮結館ゆゑ此
詞書なりさしぐ佛法を忘れふ神垣の中に来り合せて誠にふ
も涅槃會んといへる心を。何りひもかけず称えん像といへる

即今は一章之も評ぜり是又管見の説なべし其あり為
なるまは。思ひもうけを浮華金をもつて有べし又其は
ざれだにて祝ふ像とはいふべし此像の事に眼をすべし
右いづまも足恭妄語の二ツは遁れず。元是何某は思ふ事
もう肉眼をもつて窺ふ注評なれば地の口ふ。もしいふ事も
有べし性理の句解にもいふ。蠡をもつて海を測に似たり何ぞ
及んいふも神道に佛法を忘べしとなれば佛をんといひ。
経を深愛といひ。幸を夏葦といふ。其を新ひまて。浮華像と
いふ事も忘詞なるん候神釈儒道といふれども皆人の本性小
かへしも見ぬ為は愛にして一體の天心を説のこと。忘詞といふも

後は事なら見ふ愛をもとより隔ひるべき謂なし。諸は法を
影と像は若し清く浮かれば彼も程なしとや。志ひ何
まで時所の愛へ異なれば喩に水波と隔て小人愛の機を
合へるかゝへりつし。豁然として貫通せしめん為の興奪の法なべ
此大本分明なるべし書に着し法に着し無く佛者は神道を
識ず。神道者は佛者を知り。儒者は神佛兼て偽る事新ひ
皆是前に立へる猿にきせる猿の面に奈何となれば。先王
天徳を継で五常倫理を正し教化てひ民にくだけてより
誰か出る時戸口より出ざるを得ありや。此道にあらざらんやと
孔子宣て誠なるの事。不姓日に用ひて知ざれば聖人乃

德化を蒙ることを以て見性解
脫の法を示し。廣く方特無情草木國土よりまで
皆倶成佛の化度をあづかるぶるゆゑ。神道ハ我国
の王法ぶり
皇統神統天とうふ。ひたぶるに一王万世の国ぶり
誠直清潔を高天ぶ原よりも
重ぶる恩澤を浴をざるおなし。最も同ぶかるぶる其
識を處人混ずぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。即今異國の教法を憑る僧
者俗を吾釈の蒼生あらずや。ハ。
ハ嗚呼。何ぞや。元来天心のまゝなるを神ぐ。ひ佛ぐ。ひ聖

人ぐふ其本来の自性を養て涅槃ぐ。ひ般若ぐ。ひ
菩提ぐ。ひぐふ。儒ハ明徳ぐ。ひぐふ。神ぐ。ひハ自己の霊神ぐ。ひぐふ云
なり。相ぐ。ひぐふを離るゝをハ初めよ。本来不滅をぐ。ひぐ。ひ
学て無量寿佛と称号せり。ぐ。ひぐ。ひ業識
取捨の見いまだ滅ざるぐ。ひぐ。ひ生滅ぐ。ひぐ。ひ心を以て少人ぐ。ひ
説ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ涅槃像ぐ。ひぐ。ひ
事ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ。世尊ハ入滅ぐ。ひぐ。ひ像ぐ。ひぐ。ひ
殆ぐ。ひぐ。ひ悪なるべし。涅槃ぐ。ひぐ。ひ心ぐ。ひぐ。ひ
ぐ。ひぐ。ひ道をぐ。ひぐ。ひ人ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ秘ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ作りなぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ涅槃像ぐ。ひぐ。ひ
ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ。今ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ天心の作
ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ。ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ心ぐ。ひぐ。ひ
ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ。ぐ。ひぐ。ひぐ。ひぐ。ひ

なる時ハ心ぞへなり。神といひ佛といふ。元是人なり。さはなき其
形ハ地水火風の四大をはなれ。ほとゝ舎宅なりて。舎宅ハ
滅する期ありといへ共。自性ハ不老不死なり。此生滅なき。一
物を假りに名て真空といふ。儒ハ仁義礼智といふ。おもし
義物の體なり。用ハ動色変る物をいへり。蓋仏月ハ動靜
の二ツにして一理なり。爰に又義物一体と物にも色々死物
の説。物しく世へ伝れ共。前にいふおとし。自ハ他を以て活し
他を自を以て活するが世へ物なり。天地ハ不生不滅なりて。死
活の二ツを兼ねるものゝ唯不生不滅なるものゝ知りてハ此所に
いたりて違ふるもの歟。是を以て神道とは。自他照應と

云ひ。佛道とは入式我入といふ。衆生此本性を見失なひ
さまよふが世へ末世濟度の為に假に佛体を作り像て斯の
めく。大涅槃の眼を知らずよと愛へ給ふものゝ。神境といふ
も此意味也　天照太神宣く此宝境を視人る當於吾を
視人がおとくすべしと日本紀に見へたり。義法皆空一心の変化
にして本體虚空の如し。其心徳香ごとも見へざる也。仮りに
像を作りて解まをもふ真実の方便なり。然共神體を
させる物に何ら須悟道発明ハ佛の愛へとのゝ心得て。神通
大涅槃無二の尊像を知らず故に神垣のうち然共神
体を拝すること能ハざるなり。是時にとりてハ伊勢とも

外宮は館とも。詞書には鬼も角もいふ。金剛は神そこす
蜀しある一章にあらぬ。さればかゝる穿鑿には及ばざる所
一句の本体をいふ。神垣とは即今人と身に具したる所の
四大なり。涅槃とは生滅なりこれを合せて五大といふ
此四大は假りの一物にして生滅なり。其の一大は真空不
生不滅なり。これを神垣にたとへ神君とも心法ともいふ
なり。思ひもうあぬ祢ん像とは。そのく吾心躰を祢ん
像とは思ひもかけざるの謂なり。きたれるにいらざれば
面と目前は工夫肝要なるべしとなり。さて案は海に沽
むべしとなり。すべて詞に所にし書にいふは次所は皆なく。糟

粕なり。真理の微意は言句をもまれて考るにいらざれば
道躰の句は諭しがたし。六根は太祓も人は則天下は
神物なり。心は則神明の本主なりとのまへり。道躰の
使趣言外にいりしるべし

海棠は鼾を悟れ祢ん像　其角

是を正覚をもとめ給ふ釋尊に對して何ぞ悟れといふ。
此涅槃像といへるも。さはく受得する所は天心をさしてい
ふ也。都て表一重ハ。ぞれと眼に眼の身に落や
まく。餘情に至りて真理に相かなふやうに。よくなせるを
此道は知ひとせり。此合せて思惟有べし。此海棠は

鼾(イビキ)吹へざれば虚(コソウ)者を敲(タヒ)て寄(ヒジキ)を知(シ)る事もいふなぞ。又あれば法
ぶ小吹(キコ)ゆるとう。聞(キコ)へざるとうロをしらばこそ棒(ボウ)いやまち
て。俳門(ハイモン)乃造(ザウ)地獄(ヂゴク)へ陰(ヲツ)ざうしぶ事と知り